

剥製動物を活用したジオラマ展示の制作手法に関する研究

大阪芸術大学 教養課程 教授 若生 謙二

野生動物の剥製をその生息環境と共に展示するジオラマ展示は、1932年にニューヨークのアメリカ自然史博物館で開発され、その後わが国では1970年頃から各地の自然史博物館に開設されてきた。しかし、わが国に開設されているジオラマ展示は、主に日本の自然を展示しており、温帯林や湿原が中心となり、背景となる景観の多様性が乏しく、単相景として様式化する傾向も見られている。

本研究では、動物の剥製をジオラマとして展示する手法について、アメリカ自然史博物館の作例の詳細を把握した上で、わが国のジオラマ展示の実状を把握し、新たなジオラマ展示を創出する可能性について考察する。

今日、わが国の各地の自然史博物館で見られる、野生動物の剥製を森林などの生息環境と共に展示するジオラマ展示は、アメリカ自然史博物館に1932年に開設されたゴリラの展示から始められたアフリカの展示、北米の展示などの体系的なジオラマ展示の影響をうけてつくられてきた。同館の展示は、剥製動物の精巧さと奥に広がる背景画の写実性から迫真的な展示となっており、その後、全米、欧州、日本など世界の各地の自然史博物館のさまざまな展示に影響を及ぼしてきた。同館のジオラマ展示については、著書としてまとめられたK. Wander (1993)らの研究がみられるが、その後、各地に開設された展示については、館史の記載を収集する必要がある。わが国の博物館の剥製を用いたジオラマ展示の全容については、各地の博物館展示を調査して明らかにする必要がある。

本研究では、はじめにジオラマ展示の歴史をとらえ、アメリカ自然史博物館のジオラマ展示について、文献をもとに、その展示の考え方、展示の構成をとらえ、剥製と背景画がいかに制作されてきたのか、その詳細を把握する。それらをふまえて、同館の影響をうけて各地に開設された動物剥製のジオラマ展示について、それらの実態を把握する。これらの成果をふまえて、新たなジオラマ展示を創出する可能性と課題について考察する。

アメリカ自然史博物館のジオラマ展示に至る歴史

欧州の博物館では、動物の剥製を個別の標本として展示することが行われていたが、1815年にロンドンのバロック博物館で剥製を生態的な環境として展示しようという動きが現れ、1878年にロンドンのサウスケンジントン博物館で鳥のジオラマがつくられる。生息地での動物群集の暮らしを再現する用語として、英語圏では *habitat diorama* が用いられた。

アメリカではじめての *habitat diorama* は、1889年にミルウォーキー博物館で、カール・アケレイ (Carl Akeley) がウィスコンシンンの草原と森林を表現し、「川のマスクラット」という展示をつくりだした。その後、アメリカ自然史博物館の初期のジオラマ展示として、鳥類キュレーターのチャプマン (F. M. Chapman) が環境保護の目的でジオラマをとりいれ、ペリカン島のジオラマを開設する。その後連邦政府は、その地に鳥類保護区を設定

する。

アメリカには開拓の最前線としてのフロンティアがあり、そこには原生自然としてのウィルダネスがみられた。アメリカの地には、多様な原生自然がみられ、植物生態学者クレメンツと動物生態学者シェルフオードらは、この自然に着目して植生と動物群集を取り込んだ生態学的な地域単位であり、ステップ、温帯林、亜熱帯などを表現するバイオーム (biome) という概念を提唱する。

アメリカ自然史博物館のジオラマ展示

アメリカ自然史博物館のジオラマ展示は、先述のカール・アケレイによって、アメリカと世界の自然景観であるバイオームを表現する展示として体系化される。アケレイは野生動物の生息環境の保全を訴えるために、剥製によるジオラマ展示を体系化する。野生動物を銃によって捕殺するが、それは彼らの生息地保護を訴えるために、種の代表としてジオラマのモデルにするためであった。そのために剥製の完成度と共に、その周囲の環境と背景が一体となり、観客の心に訴えるジオラマを完成することに力を注ぐ。

ジオラマの作成にあたっては、その生息地を調査し、動物を狩猟して収集し、透視画法で精緻に描かれた背景画のもとに精巧につくられた剥製の動物を配置し、一体としての景観としてジオラマをつくる。もう一つは、バイオームの多様な生息環境を隣接して展示し、生息環境の展示を生態学的に体系化したことである。観客は視線高近くで剥製の動物を眺め、奥の背景画は緩曲面となり、剥製を見た視線と奥の半球形の透視画法で描かれた背景画を一体として眺め、数十キロ先にある風景とつながっているような景を創出している。

同館の影響をうけたジオラマ展示

アメリカ自然史博物館のジオラマ展示は、その後、シカゴのフィールド自然史博物館、サンフランシスコ自然史博物館をはじめ、全米の自然史博物館のジオラマ展示の影響を及ぼしている。さらにわが国の自然史博物館の展示にもジオラマ展示というジャンルをつくるなどの影響を及ぼしている。

群馬県立自然史博物館群馬の自然と環境では、半円形のジオラマをつくり、葉も造作した精巧な擬木を配して群馬の温帯林にくらすニホンジカやホンドキツネなどのいる環境を表現している。背景は絵画で樹林を描いており、森の林床にはササと共に落葉を敷き詰めている。また、尾瀬沼の展示では、半球形のドームの中に一面のニッコウキスゲの湿原を擬草でつくり、その背景となる山並みと空を描画で表現している。ともに擬木、擬草の完成度が高く、背景画との一体感の演出に成功している。

剥製によるジオラマ展示の創出には、精度ともに、奥の背景画との一体化をいかに図るかが重要である。